

アクティブラーニング科目「学生プロジェクト」で 英語英米文化学科学生チームの旅企画が商品化

大学の共通教育科目、アクティブラーニング科目「学生プロジェクト」は学生が自らやりたいことを考え、実際に企業の協力や指導を仰ぎ実践的な学びを行いながら社会に通用する知識を養成するカリキュラムです。この学生プロジェクトでJAL/JTBとの産学連携プログラムを実施。2014年度は文学部英語英米文化学科4年生の旅行企画が商品化され、3月に発売されました。

プロジェクトを計画したのは英語英米文化学科の楚輪松人先生と上原尚子先生。上原先生がエアラインプログラムの授業で以前からJALの協力を得ていたこともあり、「学生目線の企画をぜひ立ててほしい」との要請があって今回のプロジェクトが実現しました。学生は三人以上のチームを組んで企画を立案。JALやJTBの担当者からの指導も



「最終プレゼン」の様子

受け、中間発表を一回、最終プレゼンを一回行います。最終的に残ったのは6チーム、その中から湯浅美月さん、山本智奈美さん、中嶋彩乃さん、船戸友美子さんのチームの企画「沖縄の『美』をたどる美人旅」が選ばれたのです。

四人とも「食や観光をどう『美』と結びつけるか、というところが一番苦労しました」と口をそろえ、企画の打ち合わせは大変だったと話します。その反面「計画することが楽しかった」「初めて沖縄に行く人でも楽しめるように工夫するのが楽しかった」との声も上がりました。また実際に沖縄へ足を運び、自分たちで企画したルートをたどりながら写真も撮影。こうした学びの結果、「グループでいろいろな意見を交わし、自分とは違う考え方を知った」「目標に向かってみんなで努力して追求する大切さがわかった」「お客様のことを



考えて作ることは大学生にはなかなかできない貴重な体験だった」など、得られるものも大きかったようです。「この授業を通して実際に企業の方々とかかわり、企画の立て方やチームで動くことの重要性を身につけたと思います」と楚輪先生も話します。できあがった企画は、食や体験などが盛り込まれた、まさに「学生目線」の内容で、現在までに多数の人々からの申し込みがあるほど人気です。

今年は「大学生の旅行で行く旅」の「冬の北海道」がテーマ。それぞれのアイデアを出し合いながら、10月の商品化をめざして各チームで企画を進めています。

大学の教育・研究の質を保証 大学評価で適合認定を受ける

2002年に学校教育法改正が行われ、2004年度より日本の大学は文部科学大臣の認証を受けた評価機関による評価を7年以内の周期で受けるという「認証評価制度」が義務づけられています。

本学では1994年に大学自己評価委員会を発足。自己点検や評価を毎年実施、その結果は金城学院大学自己点検・評価報告書「WINDOWS」として1999年、2002年、2004年及び2008年に発刊し、公表しています。これまでに、2003年及び2007年に大学評価を受け、各年とも大学基準に適合していると認定を受けました。

今回は2014年に公益財団法人大学基準協会による大学評価を受け、2015年3月に大学基準に適合していると認定されました。大学評価結果の中で、「学生のキャリア形成において進路選択を支援する体制が組織的、体系的に整備された点や、新たな『特別研究機関制度』の導入により若手教員の人材育成が行われている点」が特色として評価されました。認定期間は2015年4月から2022年3月までとなります。

この評価結果を今後の指針にすると同時に、さらなる改革、改善に結びつけていきたいと考えています。



★金城学院大学点検・評価報告書「WINDOWS」は、大学ホームページ「大学概要」自己点検・評価報告書からご覧いただけます。

Learning commons

[ラーニングcommons]

さらに活発な学習スペースへ ラーニングcommonsの魅力

学生が自由な発想で主体的に学ぶことができる空間として、昨年6月N1棟にオープンした「ラーニングcommons」。自由にテーブルをレイアウトできるグループワークエリアやインタラクティブプロジェクターを使ってさまざまな発表が行えるプレゼンテーションエリア、サークルやゼミなどで活用できるミーティングエリアがあり、学習の用途に応じ利用できる空間です。

「開設された当初は、ラウンジと勘違いをして普通におしゃべりをしたり、食事をしたりする学生もいました」とラーニングcommons係長の長坂知美さんは話します。「一人ひとりにこの空間の利用方法を話し、理解を得た成果もあり、現在は学びの空間としてしっかりと定着していると思います。また新入生にも、ここで勉強する先輩の姿を見ることで認知が広がったと思います」といいます。

特にグループ学習やゼミ発表の練習、授業の企画準備で使う学生が多いとのこと。ある学生グループが『イツメン(※いつものメンバー)といく台湾旅行』という旅の企画をこの場所で作り上げ、実際に旅行会社のツアーとして企画が通ったという例もあるように、自由な空間で活発な意見を交わしながら



パソコンやプロジェクターなどの貸し出しも行なっている

考えることは魅力的な企画へとつながるようです。また国家試験やTOEICの勉強をしている学生同士で情報交換をしあうこともあり、仲間との交流の輪が広がることも多々あります。長坂さんも「今後はもっとプレゼンテーションエリアを活用してほしいと思います。自分が経験したことや考えていること、学習の成果などをほかの学生に発表できる場として活用してもらいたいです」といいます。

ほかにも国際交流センターや言語センター、キャリア支援センター、図書館などと連携を図り、留学説明会や就活セミナーなど、さまざまなイベントを随時行っています。こうしたイベント開催の情報やグループワーク

エリア、プレゼンテーションエリア、ミーティングエリアの予約状況はホームページで確認ができます。自由な学びの空間を積極的に活用して、さらに充実した学生生活を送ることを期待します。



「ミーティングエリア」の様子

韓国語勉強法やTOEICスコアアップ対策など 学習意欲を高めるセミナーも開催

ラーニングcommonsでは昨年、「韓国語勉強法体験談」「TOEIC大学3年間で約400点アップの勉強法体験談」を各二回開催し、多くの学生が参加しました。

「韓国語勉強法体験談」では、夏休みに韓国で、3週間韓国語を学んできた学生による体験談が行われました。実際に使用したテキストも紹介しながら勉強法などを話し、体験談のあとには学生からの質問や相談にも対応。「授業で韓国語の基礎を学ぶことが大切」「生の韓国語を聞き、使うこと」などのアド

バイスにうなずく学生の姿も見られました。

また英語英米文化学科の4年生による「TOEIC大学3年間で約400点アップの勉強法体験談」では、日頃の勉強法と長期休暇の勉強法の違いや大学の図書館の活用法、おすすめのテキストなどが紹介されました。参加者からは「図書館やキャリアアップ講座など、学内で活用できるものを今後は積極的に活用したい」「勉強に対するモチベーションが上がった」などの声が多数聞かれ、大変好評でした。



「韓国語勉強法体験談」の様子

★ラーニングcommonsの特設ページ

URL <http://www.kinjo-u.ac.jp/commons/pc/index.html>

中学校テニス部が全国選抜大会へ出場 日頃の成果を出して白熱の試合を展開

去る3月28日に香川県総合運動公園テニス場で「第3回全国選抜中学校テニス大会」が行われ、男女各32校の中学校が出場。金城学院中学校テニス部も厳しい予選を勝ち抜き、東海地区第3位に選出され、憧れの大舞台で力を発揮しました。

テニス部の部員たちは今回の大会の一回戦の相手が関東の強豪校、小平市立小平第二中学校と決まってからさらに猛練習。関東の中学校と練習試合を行ったり、また高校生の先輩方に練習をお願いしてスピードボールになれるようにしたりとさまざまな努力を積み重ね試合に挑みました。



試合当日は「積極的に攻めていく」ことを目標に、日頃の成果を出し切って全員が力いっぱいプレー。ダブルス2本、シングルス1本の3本勝負でしたがいずれの試合も熱戦を展開。選手はみな最後までボールに食らいつき、あきらめることなく攻めていきました。こうした選手たちの頑張りに応援も白熱。みんなが大きな声を出して選手たちを元気づけました。

チーム全員が練習の成果を十分に発揮でき、金城学院らしいテニス

と応援を含めた戦いで試合を展開。惜しくもあと1歩のところまで勝ちきることはできず1回戦敗退となりましたが、チーム全員が力を出し切った悔いのない試合でした。

結果は残念でしたが、素晴らしい経験ができ、「夏の全国大会で1回戦を突破する」という新たな目標を見つけることができた中学テニス部。今回の試合を通して、まだまだ改善しなくてはならないさまざまな課題を発見。チームが一体となってこれらの課題を一つずつ克服し、さらに厳しい練習を自らに課して積み重ね、レベルアップしていきます。

2014年度卒業生の進路状況

金城学院大学へは191名が進学

外部受験では国公立大16名や早稲田大6名、

慶応義塾大6名、南山大45名など近年では最高の合格実績

今年度の金城学院大学への進学者数は、内部推薦者176名に一般推薦・受験での進学者15名を加えて計191名(卒業生全体の54%)で、内部推薦では全員の生徒が第1希望の学科に進学することができました。

外部受験コースでは、国公立大学合格者数が名古屋大1名・名古屋工業大4名・名古屋市立大2名・岐阜大3名など合計16名となり、ここ数年では最多の合格を得ることができました。

有名私立大学へも早稲田大6名をはじめ、慶

応義塾大6名、上智大1名、東京理科大3名・青山学院大7名・明治大6名・立教大11名・同志社大7名・立命館大7名・南山大45名・愛知医科大(医)2名・愛知学院大(歯)6名など、こちらも例年以上に多くの合格者を出すことができました。

また「協定校推薦制度」を利用し、関西大学大へは12名、同志社女子大へは2名の生徒が進学をしていきました。卒業生の今後のご活躍をお祈りしています。

国公立大	14
私立大	127
金城学院大	191
国公立短期大	0
私立短期大	0
専修・各種学校	2
就職	0
進学準備	16
海外留学	4
卒業生総数	354

(進学者実数)

言葉とアイデンティティについて弁論を展開 高校1年生の尾島さんが昨年度英語弁論大会で3位に

去る2014年12月12日に東京のよみうり大手町ホールで「高円宮杯第66回全日本中学校英語弁論大会中部日本地区代表決定予選」が行われ、現在高校1年生の尾島百合子さんが愛知県代表として出場。上位7校の一つに選ばれ、翌13日に全国から選抜された27校による決勝大会に出場し、見事3位に選ばれました。

弁論大会出場を決めたのは「小さいころから英語が好きで挑戦したいと思ったから」と尾島さんは話します。大会までは英語の先



生とともに本番さながらの状況でスピーチ練習を繰り返しました。

当日は「言語と個性」をテーマに5分間スピーチ。中学2年で行ったアメリカのサマースクールでロシア人の女の子に出会い、「自分はロシアのアイデンティティを失いたくないから、たとえ英語を話すときでもロシア語の発音を大切にしている」といわれたことよって、言葉とアイデンティティには深い関係があるのではないかと思い、テーマに選んだといいます。最後は「もし自分が総理大臣になったら、お互いのアイデンティティを尊重しつつ、日本人としての自分をきちんと表現できるような国にしていきたい」と締めくくり、すばらしい英語力と会話の表現力が高く評価されました。

決勝大会のあとには記念レセプションが行われ、高円宮妃やケネディ駐日米国大使が同席される中、尾島さんはあらためて入



賞者スピーチを行いました。「大会で同じ志を持つ人にたくさん出会うことができている刺激になりました」と尾島さんは話します。今年も英語弁論大会に出場する予定の尾島さん。「できる限りベストを尽くしたい」とすでに練習を開始しました。今年もすばらしい成績をおさめられることを期待します。

——原文掲載

Identities in Languages Yuriko Ojima

“I would add English as an official language of Japan.” That was my answer in regards to a question asked by my teacher, “What would you do if you became Prime Minister of Japan?” The first reason is that if we are able to speak English, we can communicate with foreigners with ease, and it will be useful for our businesses and education. Secondly, most of the latest information on the Internet is in English. If we are able to access and understand new information written in English, we can keep up with the other countries in the world.

However something changed my mind. Last summer, I went to America to study abroad, and during my time there I met a girl from Russia. One day, she asked me, “Do you want to speak English like American people?” “Yes,” I replied very quickly without any hesitation. In my head, I was thinking to myself, “The English textbooks I am using at school are all written in American English,” and “American English sounds so much cooler than Japanese English.” However, the Russian girl’s reply to me was, “I don’t think I want to talk like Americans. I am Russian, even when I am speaking English. I want to keep my accent so that I can keep my identity as a Russian.” To be honest, at first I couldn’t understand her feelings on the matter. However, when I thought more about it, I realized that our accent is a part of our identities, and our mother tongue and identity are deeply intertwined. When I thought about the idea of making English one of the official languages in Japan again, a new idea came to my mind.

- 中略 -

Now in Japan, many companies are switching to English as the official corporate language, which has both pros and cons. For example it has the problem of communication between coworkers. “Do you agree with the idea of adding English to the official language in Japan?” If someone asked me this question a few months ago, I would have said, “Yes.” But to tell you the truth, I don’t know the answer honestly. But, it’s up to our generation to decide how we face the continuation of English education, and how we use English in our society.

“What would you do, if you became Prime Minister of Japan?” “I want to make a country where we can learn how to express ourselves as Japanese, and to share our identities, and promote communication in our society.” That’s my new answer.

3・4・5歳の混合クラス編成で互いに育ち合う「縦割り保育」

金城学院幼稚園は「一人ひとりを大切に活かし、ともに生きる力を培う幼稚園をめざして」を礎として、1976年に縦割り保育を導入し、全スタッフで心を込めて保育しています。縦割り保育の魅力は個体差の大きい3・4・5歳の時期の子どもたちのそれぞれの発達に即した友達関係が築けること、年上児が年下児に対する心配や思いやる心が芽生えることなどです。また年中児は年少児と年長児の間で葛藤や我慢することを経験しながら他者への気付きや自己抑制を体得し、年下児は年上児へ尊

敬や憧れの気持ちが生まれ、遊びが伝承されることなどを通し、人間関係や社会生活を幅広く身につけます。こうして異年齢児が

かかわり合いながら遊びや生活をともにし、成長していくことを大切にしています。

子どもたちは縦割り保育の中で様々な経験を通し、成長していきます。遊びや生活をともにすることで自ら考え行動する力を養い、また遊びを通してリードしたりされたり、互いに影響し合いながら、楽しさ、充実感、達成感、自信などを身につけていき



ます。また、ときにはぶつかり合い、葛藤、挫折などの感情体験をすることで人間関係の基礎を培っていきます。

このように子どもたちが生き生きと目を輝かせて遊び、友だち、保育者との信頼関係を育くむ環境を大切に、お互いにかかわり合いながら健やかに子どもたちが育っていける幸せな幼稚園をめざしています。

“あつまり”を通して仲間意識を身につけ、成長する

幼稚園では保育の中でいろいろな年代の子との自発的な遊び＝自主的活動とクラス毎で行う活動のほか、週二回ほど年齢別活動“あつまり”を組み入れています。同じ学年があつまることで、それぞれの年齢に即した課題に取り組むことができ、互いに刺激を受けあうことができます。ただし、その場合も一人ひとりの成長に寄り添いながら課題への取り組みを行います。

中でも年長児は幼稚園のリーダーとして、子どもたちで話し合いの場を持ち、園生活全般を作り上げリードしていています。

年長児は宇宙や星に興味をもつきっかけ作りや、公共の場でのマナーを守り身に付けることをねらいとし、毎年5月の後半に名古屋市科学館・プラネタリウムを見学する課外活動を計画しています。



名古屋市科学館での課外活動



年長児はあつまりの中で担当保育者から「年長児のみがプラネタリウムに行くことが出来る!」という話を聞き、その特別感にみんな心を躍らせます。そのあと、一緒に手をつないで行くペアを決め、自分で身支度が出来るようお知らせの手紙を読み当日に備えます。

当日の行動も、年長児らしさが見られます。電車に乗る時改札で駅員さんに大きな声で「よろしくお祈いします!!」と言って通り、電車の中ではほかのお客様の迷惑にならないようにと「しーっ」と小声でお話。事前にあつまりで話し合ったことをしっかり守ろうとする子どもたちの意識が感じられます。

科学館やプラネタリウムでは、多くの感動や興味、関心が子どもたちの心に刻まれます。それはおうちの方への報告で終わらず、幼稚園で年中少児に伝えたり、絵に描いて見せてくれたり、遊びに取り入れたりとお兄さんお姉さんらしい行動でその力



を発揮してくれまます。年下児たちはその楽しそうな絵や話にワクワクし、年上児になって自分たちが行けることを心待ちにしています。

今は7月のお泊りキャンプに向けて話し合いがはじまっています。私たちの園ではキャンプは年長児とともにゼロから作り上げていきます。そのためには多くの話し合いと準備が必要です。「キャンプってどんなことをするのか?」「寝るところどうする?ごはんは?お風呂どうしよう?」とみんなで賑やかに準備が進められます。同じ年の子があつまり共感体験を重ねる中で仲間意識が芽生え、キャンプが終わるころには友だちの絆がより結束。こうして子どもたちは日々、さまざまな体験をしながら大きく成長していきます。

